

更級学生寮

岩手県盛岡市 久保 協一

市原市五井地区にある新聞販売店の日課は、朝三時ごろから始まる。後期高齢者となった店長が作業場を下りてガラス戸の鍵を開けると、ほどなく八人の配達員が下りてくる。三階建の古い建物の二階と三階は配達員の寮となっていて六畳の部屋が四室あり、簡易に区切られた二人部屋となっている。八畳ほどの作業場の中央には頑丈な木製の作業台があり、左右の壁に沿って設置された細長いテーブルの上には折込チラシが置かれている。

八人の配達員が揃うのを待っていたかのように、トラックのエンジンの音が聞こえる。それを合図に、二人が外に飛び出す。トラックが停車すると、運転席から降りたドライバーが荷台に飛び乗る。同時に外に出た二人と店内の三人が一列に並び、ドライバーから受け取った梱包を手渡しで店内に運び入れる。その梱包を残りの三人が手際よく開梱して新聞を取り出し、テーブルの上に並べていく。すべての新聞が揃うと各自が配達に必要な一般紙を数えて取り、一部ごとにチラシを入れ、それにスポーツ紙と業界紙を加えて自転車やバイクに積み込み、配達に出る。

「源さん、おはようございます」

配達員が出払うと朝食の準備をするため、女子学生が入ってくる。店長の源太は、親しみを込めて、源さん、と呼ばれている。

「今朝も、みんな元気で配達に出ましたね」

女子学生は源太の存在を確認すると、笑顔を残して食堂兼台所に向かう。病気などで欠勤する配達員に代わって新聞を配達するのは、源太である。源太を確認することは、配達員の無事を確認することにもなるのである。

五時半から六時頃になると、配達員が戻ってくる。食卓の中央には野菜が山盛りになっている大きな皿が置かれ、五人分の煮魚と卵焼きが置かれている。八人の配達員は全員が男子学生であるが、席取りで採めることはない。一時限目の授業のない学生が、新聞を読みながらのんびりと食卓が空くのを待っているからである。食事を終えると、それぞれが使用した食器を洗って棚に戻し、部屋に戻って大学に行く準備をするのであるが、今日は休日なので食堂から作業場を下り、新聞を読んでいる者もいる。

源太は元気な学生達の顔を確認すると、ガラス戸を開けて新聞販売店の外に出た。

二〇二三年の今年は猛暑が続き、配達員の健康を気遣う日々が続いていたが、十月を過ぎると秋の気配を感じるようになってきた。スポーツの日の今日、東京湾を駆け抜けて来る風が肌に心地良い。

新聞販売店の前の脇道を右に百五十メートルほど歩くと、上総更級公園がある。公園には、学生達が自習室として利用している図書館や芝生広場、あそびの広場、イベント広場、バラ園などがあるが、源太にとっての公園は修景池の周りにある遊歩道をゆつ

くりと一周し、デッキで一休みする憩いの空間となっている。しかし、今日は少しの迷いもなく、左に向かった。五十メートルほど歩くと、更級通りと交差する。その交差点を右折し、八百五十メートルほど歩くと内房線の五井駅に着く。新聞販売店から五井駅までの九百メートルほどが、学生達の通学路となっている。

源太は、五井駅の東口から駅舎の通路を通過して西口に出た。真正面に中心街の中を伸びている吹上通りが見える。その通りを一キロメートルほど歩くと養老川に架かる五井大橋が在る。百メートルほどの橋を渡って右に曲がり、川沿いの道をさらに一キロメートルほど進むと、木立が見えてくる。卯の起公園である。

昭和十三年に成立した国家総動員法によって第二次世界大戦への道を突き進んだ日本国は、昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃によって太平洋戦争に突入した。超大国のアメリカ合衆国と四年近くも無謀な戦火を交え、昭和二十年八月十五日に終戦を迎える。廃墟と化した国土は、国民の勤勉な努力によって復興が進む。結果、十年ほどの短期間で戦後復興を成し遂げた。昭和三十一年度年次経済報告で、「もはや『戦後』ではない」と宣言している。

戦後から脱却した日本国は、高度成長期を迎える。その大きな原動力となったのが、昭和三十年代から始まった東京湾の埋め立て工事による京葉臨海工業地帯の造成である。源太が立っている卯の起公園の先の五井南海岸も埋め立て工事によって整備され、大規模な石油化学コンビナートとなっている。

配達員になると、その日の夜に同室の先輩の案内で四キロメートルほどの道を自転車です井南海岸の一面にある養老川臨海公園

に向かうのが、新聞販売店の伝統となっている。圧倒的な工場群の迫力と、異次元の光の空間を作っている夜景を見るためだ。臨海公園に立つと背後には強力な照明に映し出された鉄塔群が並び、正面の対岸には火力発電所の巨大な煙突がそびえ立っている。学生達は、日本国の産業を支え、牽引してきた工場群の夜景に自らの将来を見ているのかもしれない。だが、源太は学生達にとって特別の場所である埋め立て地に足を踏み入れることはなく、卯の起公園の入り口にある「はまぐりの碑」と刻字された石碑の前で必ず足を止めた。

はまぐりの碑には、太古より内湾の漁場として魚介類の宝庫であった市原市の海岸が京葉臨海工業地帯造成の一環として埋め立てられることになり、関係漁民三千二百八十四名が漁業権を放棄することになった経緯が記載されていて、末尾に「現代科学の粋を集めた此の工場群の建物の下には今尚生きながら葬られた幾千万の成員稚貝があり、この供養を通じて併せてこの海に生活して来た私達の先祖の霊を慰めんとするものであります。昭和四十四年八月市原市長鈴木貞一撰」と刻字されている。

源太の父は漁業協同組合に所属する漁師であり、母も遠浅の海岸でアサリやバカ貝などの採取と海苔の養殖に従事していた。働き詰めの両親であったが、食べ物も豊富で日常生活に困窮したという記憶は全く無い。源太の記憶に残っているのは、豊かな日々の生活だけである。取り分け、母が多忙な日々を縫って自家製の海苔で作ってくれた鰹節や近隣の農家から譲り受けたかんぴょう

の入った細巻き寿司の味は、今でも口の中に残っている。盆と正月には、その細巻き寿司の入った太巻き寿司を作ってくれた。房総太巻き寿司は、源太にとって特別の日の料理となっていた。

だが、豊かな漁民としての生活は、昭和三十三年に漁業権を放棄したことにより激変する。優秀な漁師であった父にとって、海は人生の総てが収まっている空間でもあった。その海から陸に上った漁師は、漁業補償金と引き換えに人生の総てを失ってしまったのである。居場所の無い漁師に、裏社会の人間が忍び寄り、狙いは、漁業補償金だ。気力も正常な判断能力も失った漁師は、巧みな誘いに乗って賭博にのめり込む。親子三人の新たな生活の基盤を築くはずだった漁業補償金は、瞬く間に消えてしまった。

数日後、埋め立て工事が行われている海面に浮かんでいる漁師の死体が見つかった。源太が、小学校を卒業する少し前のことである。事故死として処理されたが、残された母と子は父が自らの意思で海に帰ったのだと思っている。

総てを失った母と子は、遠縁を頼って新聞販売店で働くことになった。二人の新居は、新聞販売店の裏側にある六畳ほどの物置部屋であった。古新聞やダンボールに囲まれた空間に、なんとか母と子の布団を敷くことができる狭苦しい部屋ではあったが、寝る場所と食べる物があれば、生きていくことはできる。

母は二人が生きていくため、必死で働いた。朝三時前には起きて配達員の食事を作り、日中は店番をしながら店内の清掃などをし、午後三時ごろからは夕食の準備に取り掛かる。食後の後始末をして就寝できるのは、夜の九時から十時ごろとなる。

そんな母に小学生であった源太の世話をしているゆとりなどなかったが、源太は少しも寂しい思いをしたことはない。店内には常に働く母の姿があったし、配達員達もこまめに声を掛けてくれた。新聞や折込チラシの整理を手伝うと褒めて貰えたり、大勢で食べる賑やかな食事も楽しく、新聞販売店は小学生の源太にとって掛け替えのない居場所となった。

源太は、中学生になると新聞配達の手伝いを始めた。配達区域は店の周囲で配達部数も少ないが、多少の駄賃が貰える。働いて駄賃を手にするのは嬉しかったが、加えて新聞販売店を支えている一員なのだという充実感も得ることができた。そして、中学校を卒業すると当然のことのように新聞販売店の従業員となった。

源太が二十歳を迎えて間もなく、一人の人生に大きな変化があった。新聞販売店の経営者から、隣接の千葉市で新たに新聞販売店を開業することになったので、新しい店で働いてほしいと告げられたのである。千葉市に移っても仕事は保証されているので、生活に困ることはない。しかし、市原市の新聞販売店は二人にとって生活費を得るためだけの職場ではなく、人生の総てが収められている空間となっていた。その店を離れることなど、できるはずはない。話し合いの結果、二人が店を購入することで折り合いがついた。購入資金は、地元の信用金庫から借りることができた。十年か十五年もあれば返済できる金額である。二人にとって、この借金の返済は負担ではなく働き甲斐となっていた。

新聞販売店を購入すると、母と子は従業員ではなく経営者となる。源太は、二十歳を少し過ぎたばかりで店長となった。はまぐ

りの碑が建設された年である。新聞配達員から店長になっても、日常の仕事に変わりはなかったが、心に押し掛かる責任感は格段に重くなった。その重い責任感は、源太にとって大きな生きがいでもあった。

源太が店長となって十年ほどが経過したころ、朝食の後片付けが終わった食堂でのんびりと新聞に目を通してしていると、店の外に若い男性の姿が見えた。新聞を買いに来た客なら店内に入ってくるはずであるが、ガラス戸を開けることに躊躇しているように見える。少し気になって、食堂から作業場に下りると若者と目が合った。源太が頭を下げると、若者は遠慮がちにガラス戸を開けて入ってきた。

「学生でも、新聞配達、できるでしょうか」

若者が、控えめに質す。

「できますよ。誰にでもできます」

新聞の配達に関するクレームか購読を止める通告かもしれないと覚悟していた源太は、予想外の問い掛けに戸惑って的外れの対応をしてしまった。

「自分にも、できるでしょうか」

若者が、源太を直視して聞く。

「もちろん、できますよ」

オレとかアテ、時にはワシといった言葉が飛び交うがさつな店内で、自分という爽やかな言葉を耳にすることなどあり得なかった。そのあり得ない自分に、源太の的外れの対応が決定的なもの

となったのである。

「ありがとうございます」

緊張が一瞬にして解けた若者は、深く頭を下げた。

「大沢良太です。新聞配達は、明日からでもできるでしょうか」

大沢が、嬉々として質す。

（明日から、配達する？）

源太は大沢の安堵した笑顔を見て、やっとの的外れの対応に気づき、苦笑した。大人が、新聞配達の仕事ができる能力があるか否かを確認するために来店することなどありえない。来店するとしてたら、求職に決まっている。

「新聞配達の仕事、したいのですか？」

源太は、店長として求職者に向き合った。現時点では、配達員は足りている。だが、この若者との出会いを簡単に失いたくなかった。若い店長を見下し、働いてやるから雇え、といった態度で来店する求職者との面談がほとんどで、このような好感の持てる求職者との面接は初めての経験でもあった。

「今、どこかにお勤めでしょうか？」

源太は、作業場の古い木製の丸椅子を勧めながら質した。

「いいえ。大学生です」

大沢が、少し声を落として応じた。

（学生さんか——）

今まで学生の配達員は全くいなかったし、学生の採用など考えもしなかった。

「新聞配達は、朝刊と夕刊がありますけど、大学の授業、ありま

すよね」

源太は大沢の真剣な眼差しに、仕事を求めなければならぬ差し迫った理由があるのだろうと察しは付いたが、朝刊の配達はともかく、大学の授業があるのだから夕刊の配達はたぶん無理だろうと思っていた。

「配達時間は、何時ですか」

大沢が、曇みかけるように聞く。

「朝刊は朝三時ごろから五時半ごろで、夕刊は午後三時半ごろから五時ごろかな。時間は、それほど厳密なものではなく、配達区域によっても多少の違いはあります」

源太が、穏やかな表情で応じる。

「自分の履修している講義は、一時限から三時限までなので、三時半ごろまでにはお店に来ることができます」

大沢が、助けを求めるといったように言った。源太が通学した小学校や中学校では学校が時間割を決めていたが、大学では学生が受ける授業を選ぶことができるということを知った。そうだとすれば、学業と新聞配達の両立が可能かもしれない。配達員の確保に苦労していた源太は、眼前の若者に一筋の新たな可能性を見た。

「大学の授業と新聞配達、たいへんだと思いますよ」

源太は、再度、働く意思を確認した。今現在、配達員は足りているが、学生の配達員という可能性を失いたくないという思いが心中に芽生えていた。

「朝、牛乳配達をしている友達もいるし、夜、ラーメン屋で働いている知人もいます。アルバイトをしなければ大学で学べない学

生は、少なくありません。自分もアルバイトをしなければ、大学を去ることになります」

大沢は源太の親身な対応に、家庭の経済的な事情により大学に収める学費が滞納しており、退学しなければならなくなるかもしれないことなど、抱えている悩みを総て打ち明けた。

「もし、よかつたら、明日の朝刊から配達してみませんか」

新聞の配達部数は、決まっている。新たに配達員を雇うのは、欠員が出たときである。学生を雇うとしたら、現職の配達員が辞めた時ということになるが、源太は即日の採用を決めた。胸中に抱える悩みを、率直に打ち明けてくれた学生である。希望に沿う対応以外の選択肢はあり得なかった。

対応策は、簡単である。源太が配達している区域を学生に渡せばよい。源太は大沢が大学生であることに配慮し、まずは半分ほどの配達区域を学生の配達区域とした。配達時間も、他の配達員から三十分ほど遅くし、かち合わないようにした。

配達員となった大沢が、源太に予想外の驚きをもたらした。配達員にとって、新聞配達は食べる物と寝る場所を確保するための義務に過ぎない。義務は、できるだけ簡単に済ますに限る。だから、義務を果たして店に戻って来る配達員の表情に特段の変化はない。あるとしても、悪天候の日の愚痴を呟く不快な表情ぐらいのものだ。だが、大沢は違った。晴れ晴れとした表情で帰って来るのである。

「大学に行きながらの新聞配達、辛くない？」

源太は大沢の爽やかな表情が気になったが、新聞配達は楽しい

か、と率直に聞くのは子供を揶揄するような気がし、敢えて逆の言い方をした。

「早起きして、運動ができる、こんな恵まれたアルバイトはありませんよ」

大沢が、笑顔で応えた。

(新聞配達が、運動……)

源太の思考は、大沢の言ったことに付いていくことができなかった。大沢は、その源太の思考に追い打ちを掛けた。

「今配達してきた新聞紙には、国内外の様々なニュースや生活に関連する情報が詰まっています。大げさな言い方かもしれませんが、知識の宝庫です。それを待っている人達に、今朝も自分が届けてきたのですよ。辛いことなど、ありません」

大沢は、一呼吸置いて続けた。

「新聞配達が終わると、無料でお店にある全国紙に地方紙、専門紙、それにスポーツ紙まで読むことができます。自分のような学生には、望外の役得ですよ。感謝します」

大沢が笑いながらぺこりと頭を下げ、手にした新聞を軽く振って下宿先に戻っていった。

(中学生の時から配達していたのが、紙の束ではなくて国内外のニュースや生活情報が詰まった知識の宝庫だったのか)

源太が大沢の言葉を心の内で復唱すると、寝る場所と食べ物を求めて来る配達員のたまり場だと思っていた店に、微かだが別の可能性が秘められているような予感がした。

「自分の友人に、新聞配達をしたいという大学生がいますけど、

雇ってもらえないでしょうか」

それから一か月が過ぎた頃、突然、大沢から思いがけない依頼があった。学生の配達員は、大歓迎である。配達区域は、従前の半分となった源太の配達区域となる。その後も、学生からの配達員になりたいという希望があったが、現職の配達員の解雇はできないので予約制とし、欠員が生じた時に採用することにした。

「経済的な事情で、大学進学を諦めなければならない高校生がいます。もし、大学の入学金と初年度の授業料分のお金を給料の前借りとしていただき、住み込みで新聞配達できれば大学に行くことができます。採用を考えてみてはいただけませんか」

学生の配達員を採用し始めて半年ほどが経過したころ、大沢から新たな依頼があった。大沢は少し申し訳なさそうな表情を見せていたが、今度の依頼も源太には貴重な提案であった。

学生の配達員は四人に増えていたが、四年生が三人で三年生が一人となっている。四年生は半年後には卒業し、この店を去っていく。三年生も一年半後にはいなくなるが、一年生だと四年間の勤務が期待でき、店の維持に欠かすことのできない配達員の確保が飛躍的に安定することになる。だが、源太の胸中に飛び込んできたのは、配達員の安定した確保ではなく、大学への進学を諦めなければならぬ高校生がこの店に住み込んで働けば大学に行くことができる、ということであった。

(新聞紙とチラシに囲まれて朝夕の配達に追われてきただけの店が、大学進学を支援できる店になるかもしれない)

源太の表情が、引き締まった。

「分かりました。新聞配達をしても大学に行きたいという高校生がいたら、紹介してください。幸い、空いている部屋が一つありますので、学生さん用として確保しておきます。狭いけど、二人までは寝泊りできます。もちろん、入学金と授業料も前貸しできます」

源太が、きっぱりと断言した。

「前貸しは、だめです」

台所で二人の会話を楽しんでいた源太の母が、意識的に厳しい口調で言った。母は店の運営は総て源太に任せていて、口出しをすることはなかった。その母が、学生の採用に意義を唱えたのである。源太は、驚いて母を凝視した。

「給料の前貸しをしたら、学生さんをお金で縛り付けることになり、可哀そうじゃない。入学金と授業料は、奨学金としてお貸ししたらどうでしょう」

母の眼差しは、真剣である。源太は、その真剣さに生きるためとはいえ、中学生の時から我が子を新聞配達に縛り付けてきた母の深い悲しみを見た。

「なるほど。奨学金ならば、社会人になって経済的にゆとりが出たら返金してもらえばよいか」

源太は、母の心中を推し量って同意した。だが、母の表情からは、完全に納得していないことが読みとれる。源太は、少しの間を置いて続けた。

「奨学金なら、大学を無事に卒業できたら返済は免除されるとい

うこともあるか」

源太が独りごとのように言うと、母が何度も頷いた。

「そうだよね。四年間も大学で勉強しながら働いていた学生さんに、奨学金を返して、なんて言えないよね」

母が、そう言って笑った。

「四年間働いたら全額免除、三年間なら四分の三、二年間なら半額、一年間なら四分の一を免除するということでよいかな」

源太が納得して言うと、母は満足そうに頷いた。

「本当ですか！」

驚いたのは、大沢である。無理を承知で入学金と初年度の授業料の前借りができるか質したのに、返ってきた条件は全額免除である。

「学生さんに四年間も働いていただけなら、店としても大助かりだ。ぜひ、その高校生にこの店のこと、伝えていただきたい」

源太が、大沢を見て真剣な表情で言った。

「ありがとうございます。二人、採用していただけるといことでもよろしいですね」

（来年は空き部屋が一つだけなので住み込みができる学生は二人だけだが、二、三年も待てば残りの三つの部屋も空くだろう。そうなるかと、全員が学生さんか）

源太の期待は、一年半ほどで達成された。店内に響き渡っていた卑俗な会話や賭け事の自慢話も消え、若者の将来の夢を語る会話や時には真剣な議論が交わされる店となった。

「ごめんください」

夕刊の配達が終わって、一週間の中で最も寛ぐことのできる土曜日の夕食も終わりに近づいてきたころ、二人の若い女性がガラス戸を開けて入って来た。

「源さん、お客さんですよ」

作業場で新聞を読んでいた学生が、台所兼食堂の一角に置かれた古い木製の机で伝票の整理をしている源太を呼んだ。

「学生が新聞配達しているお店って聞いたけど、本当に皆さん、学生の方ですね」

源太が作業場に下りようとすると、店内を興味深そうに見渡している若い女性の声が聞こえてきた。

「突然、お伺いし、申し訳ありません。こちらのお店では、学生が新聞配達をしているということですが、女子学生でも配達ができるでしょうか」

学生達の和やかな会話に安堵したのか、若い女性の表情には少しの緊張感も見えなかった。

源太は、一瞬、言葉に詰まった。女性でも、配達はできる。だが、質問の趣旨は、採用の依頼であろう。採用となると、配達員は足りているし、来年の三月に卒業する学生の代わりは、大学入学を目指している高校生の採用を予定している。

「夕刊は問題ないけど、朝刊は暗いうちに配達することになります。女学生の方にお願ひするのは少し心配です。でも、新聞配達ではなく、お二人に朝食と夕食を作るのを手伝ってもらえたら、この店のおばさんとしてはたいへん助かります。どうでしょう？」

言葉に詰まっている源太の後ろに立っていた母が、笑顔で女子

学生に語り掛けた。

「採用していただけるのですか。よかった、これで大学の中退を心配しなくて済みます。ありがとうございます」

二人の女子学生が、深く頭を下げた。

「お礼を言わなければならないのは、わたしですよ。還暦が近くなって、朝と夜の賄いがたいへんになってきたのに、店長は手伝いさんを雇ってくれません。自分は学生さんを雇って新聞配達をしないで楽をしているのにな」

母が笑いながら言うとう女子学生も声を出して笑ったが、源太は苦笑するしかなかった。

「やっと新聞の配達も賄いも全部、学生さんをお願いできることになりました」

母が、積年の悲願が叶ったように呟いた。

「この店の全員が、食事付きの奨学生となるのか。源さんとお母さんは卒業していく学生を、『この店を出たら、絶対に戻って来てはだめですよ』と言って送り出してくれます。だから、この卒業生は懐かしい新聞販売店に顔を見せたい気持ちも、前に向かって進む力にしているのだと思います。みんなが社会に飛び立っていくこの店は、新聞販売店ではなく、学生寮、更級学生寮ではないかな」

来年の三月に卒業予定の学生が期待を力を込めて言うと、全員が納得して同意した。

（小学生の子供を育てながら必死で働き続けてきた苦勞の積み重ねと、中学生となった我が子が新聞配達の手伝いをするのを黙認

するしかなかった慚愧の念が、新聞販売店の経営者となった母の心に、経済的理由から大学進学を諦めなければならぬ高校生が大学で学んで社会に出ていくことのできる居場所を作る悲願を芽生えさせていたのかもしれない。もしかしたら、その居場所を我が子に託すことが、せめてもの贖罪だったのか――)

学生の会話を笑顔で見ていた母の目が潤んでいるのを見て、源太はそんな思いがした。その母は十数年後、更級学生寮で学生達に看取られながら、安らかに生涯を閉じた。

(安心していいよ。更級学生寮は、これからも学生さんたちが守っていてくれるそうさ。新聞配達も事務処理もしていない役立たずのこの老人に、更級学生寮の店長として生涯を閉じてください、とまで言ってくれた。終活まで学生さんがしてくれる。これほど恵まれた人生を送っていいのかな)

源太は、はまぐりの碑の前に立ち、埋め立てられた海岸の方向を見て母に報告した。喜寿を前にした相続人のいない源太には、新聞販売店を売却することぐらいしか思いつかなかったので、学生達に店の処分を総て任せることにした。

学生達の結論は、自分達が社会に飛び立っていく更級学生寮を次の世代に繋いでいかなければならない、ということであった。そのためには個人所有ではなく、法人所有とすることが望ましい。法人には、株式会社、合同会社、一般社団法人、NPO法人などがあるが、みんなで働いてみんなで平等に法人の運営をしていくため、一年ほど前に施行されたばかりの労働者共同組合法に基づ

く組合を設立することにした。

源太は、昨夜、学生達からその旨の報告を受けた。難しい法制度のことは理解できなかったが、これからも更級学生寮を学生達が守っていつてくれることに安堵し、大きく頷いて了解した。

(了)